

ベルトルトにおける『神学綱要』受容の問題

——ディートリヒ知性論との連関を中心に——

山崎 達也

はじめに

プロクロスの『神学綱要』が中世においていかに受容されたのかという問題解明の一端として、ドイツ・ドミニコ会における新プラトン主義的傾向がいかに出発し、いかなる契機を生み出したのかという問題の考察を以下において試みたいと思う。ここでは、モースブルクのベルトルトの『プロクロス神学綱要註解』(*Expositio super Elementationem theologiam Procli*, 以下『註解』と略す)を取りあげ、ベルトルトがプロクロスをいかに解釈し、いかに受容したのかを考えてみたい。そのさい、ディートリヒにおける知性論を視野に入れて、ベルトルトの独自性を描出したいと思う。

1. 予備的考察…

ドイツ・ドミニコ会における新プラトン主義的潮流

ベルトルトにおける『神学綱要』受容の意義を語る場合に前提となることは、アルベルトウスを起点とする新プラトン主義の流

れとそのなかにおけるベルトルトの位置の確認である。

アルベルトウス(Albertus Magnus, ca. 1193-1280)は、周知のように、アリストテレスの『デ・アニマ』、『形而上学』、『ニコマコス倫理学』等の講義をケルンで行なっているが、それと並行して、『神名論』、『天上位階論』、『神秘神学』等をはじめとするいわゆる『ディオニシオス注解』(*Super Dionysium*)や『原因論』(*Liber de causis*)に関する註解『諸原因および第一原因からの宇宙の発出について』(*De causis et processu universitatis a prima causa*)等の新プラトン主義的文献に関する註解も遺している。

アルベルトウスによるこうした新プラトン主義的傾向をドイツ・ドミニコ会においてさらに強めていったのは、フライブルクのディートリヒ(Theodoricus Teutonicus de Vriberch, 1245/50-1310)である。ストアレーゼ(Loris Sturlese, 1948-)が一九八一年に発表した論文「アルベルトウス・マグヌスと中世ドイツの哲学的文化」によれば、ディートリヒの知性論、神認識の自然性に関する教説や流出論はアルベルトウスの新プラトン主義的モティーフをディートリヒが受け継いだことを物語っている。そし

でディートリヒとエックハルトとの思想的背景となっているのは、当時パリからやってきたトマス主義的な思想傾向とアルベルトゥスの根源的な思惟との不一致にある。アルベルトゥス解釈においてエックハルトがディートリヒと同じ立場に立っていたことは、エックハルトの思想形成を考察するうえで非常に重要であると思われる。トマス主義者たちによる「学者」としてのアルベルトゥス像形成は、その権威を哲学的・神学的領域へと限定することに本質的な目的を有し、それに対して、ディートリヒ等は新プラトン主義的・ヘルメス的に志向された哲学的方向を庇護する者としてのアルベルトゥス像を形成していく。

ディートリヒとエックハルトとの関係を貫いている新プラトン主義的流れのなかにベルトルトが含まれていることはたしかである。ところで、プロクロスの『神学綱要』は、一二六八年すでにメルベケ (Wilhelm of Moerbeke, ca. 1215/1286) によってラテン語に翻訳されていたが、ベルトルトはこの書の詳細なる註解を著わしたラテン西洋世界における最初の哲学者となった。ベルトルトにおけるプロクロス解釈はタウラー (Johannes Tauler, ca. 1300-1361) に影響を与え、やがていわゆる《ドイツ神秘主義》(die deutsche Mystik) 成立の契機となっていく。

2. 現時点で明らかになっているベルトルトの生涯

モースブルクのベルトルト (Berthold von Moosburg, ?nach 1361)⁽³⁾ は、その名前の示すところによれば、ニムンヘンから北に四五キロいったモースブルク (Moosburg in der Isar) の出身と考えられる。しかし、その生年に関してはいまだに不明である。

一三二六年にベルトルトはオックスフォードで学んでいる。一三二七年にはレーゲンスブルクのドミニコ会の修道院で教職 (Lesemeister) に就いている。その後一三三五年には、ケルンにあったドミニコ会の神学研究所 Studium generale で教職に就いていたが、一三四六年にはケルンを離れニュルンベルクにいたと考えられている。しかし一三五三年に再びケルンに戻っている。一三六一年四月二〇日、これがベルトルトに関する記録の最後の日付である。

ところでベルトルトがレーゲンスブルクで教職に就いた一三二七年は、エックハルトに対して異端嫌疑がかけられた年である。その二年後の一三二九年三月二七日、教皇ヨハネス二二世によつて勅書『主の耕地にて』(In argo dominico) において、エックハルトの著作・説教から二六の命題が異端の刻印を押され、二つの命題が異端の疑いがあるとして断罪されている。こうした一連のエックハルト問題をベルトルトが経験したことは、『註解』執筆に関する大きな契機となったと言える。

ベルトルトはエックハルトが断罪されてから六年後にケルンに來ているが、当時のケルンはドイツにおける文化の中心地であり、なおかつドミニコ会が全体としてエックハルト問題に対する対応を Studium generale に求めていた。ベルトルトはエックハルト問題に対する対応策を模索する立場にあったことはたしかである。ストアレーゼによれば、『神学綱要註解』の執筆はベルトルトのエックハルト問題に対する答えであり、ドミニコ会の哲学の根底にある思索的伝統を視野に入れて、その哲学の新たな展開を念入りに練るための試みだった⁽⁴⁾。

3. homo divinus 論

プロクロスに関してベルトルトは、解題のなかで、プロクロスをまず哲学者として理解し、そしてプラトンの最も優れた弟子の一人であると述べている。⁽⁵⁾ベルトルトはさらに、プラトンとその学派の功績は認識の最高の形式を哲学的思惟のなかに導入したことに存していると理解している。

新プラトン主義者、とくにプロクロスとディオニシウスは、プラトンの業績を的確に理解し、その哲学を復活させたとベルトルトは考えている。つまり、プラトンの哲学と思惟世界はプロクロスの哲学においてはじめて厳密に秩序づけられ、その意味では『神学綱要』によってプラトン哲学の体系的性格が獲得されたということになる。ベルトルトによれば、プラトンの知恵は論証的理性とアリストテレス的知性を超越しているある種の神秘的合一を目指しているとプロクロスは語っている。すなわちプロクロス哲学の頂点は神の直知にあるということである。

ベルトルトは、正統なる神的な知恵ないし信仰の知恵だけではなく、異教の哲学者の知恵であっても、その泉は神の言葉にあると述べることに⁽⁶⁾よって、新プラトン主義の哲学的包括的な主張を真理の一性すなわち神の言葉に基礎づけている。真の哲学とは真性を認識することに関する営みであって、神のことがらないし神それ自体について語ることに⁽⁷⁾よって、哲学は神聖なる宗教すなわち神学になる。こうした哲学が、ベルトルトが理解している哲学の真の姿であり、彼はこの哲学を「最も神的な哲学」(divinissima philosophia)と呼ぶ⁽⁸⁾。要するにベルトルトは『註解』を著

わすることによって「最も神的な哲学」の構築を目指したと言える。

以上の結論から言えば、すべての人間は哲学することによって「神的な人間」(homo divinus)⁽⁹⁾になる可能性を有している。その意味ではベルトルトの哲学は、フラッシュが言うように、一種の神化論(eine Theorie der deificatio)として理解できる⁽¹⁰⁾。

概念「homo divinus」は(ルメス(Hermes Trismegistus)の神と世界との絆(nexus Dei et mundi)としての人間像と結びつくことによって、ベルトルトに新しい人間論を展開させる。すなわち人間は、自然科学的探求と博士の探求によって世界を超えて存在しており、世界の統治者(gubernator)と呼ばれる。

4. 知性論的展開

ベルトルトの『註解』の特徴の一つに、彼の知性論の展開を数えることができる。というのも、『註解』執筆の目的がドミニコ会における思索的伝統を保持しながらも、新たな哲学の構築と展開にあるのであれば、ディートリヒによって開かれた知性論の新たな地平を基盤としてベルトルト独自の知性論を展開することは必然的なことであつたと考えられるからである。⁽¹¹⁾そこでベルトルトの知性論の性格を理解するために、以下において、ディートリヒの知性論の特色を概観してみよう。

4. 1. ディートリヒの知性論の特色

4. 1. 1. 存在者の類似あるいは範型としての知性

そこでまず、ディートリヒの『知性と可知的なもの』(De intellectu et intelligibili)から次の記述を引用することからはじめよう。

「考察されるべきことは、知性であるかぎりのすべての知性は、全存在者あるいは存在者であるかぎりでの存在者の類似、しかもその本質によつて類似であるということである。このことが基づいているのは、哲学者の『デ・アニマ』第三巻の記述、すなわちすべてを作ることができるのが能動知性(intellectus agens)であり、すべてのものになることができるのが可能知性(intellectus possibilis)である。しかしこのことは、一方は現実態としてすなわち能動知性、他方は認識する以前は可能態としてすなわち可能知性であるといえ、両知性はその本質からしてすべての存在者の類似だからである。」⁽¹²⁾

知性がその本質からしてすべての存在者の類似であるということは、知性はすべてを知性認識できるということの意味する。⁽¹³⁾ デイートリヒによれば、知性はその本質から知性であり、すなわち知性は知性性(intellectualitas)という本質によつて自存する実体なのである。ということは、すべての存在者を認識するというはたらきがそれ自体として知性の対象であり、しかもそのはたらきは自己還帰すなわち自己認識であることを意味する。

知性のはたらきを以上のように解し、その解釈をより先鋭化する方向に知性の構成的構造がはつきりとその姿を現してくる。われわれが現実世界の事物を認識し、その本質を定義する場合、その定義づけというはたらきの始原は知性にあり、すなわち人間知性によつて事物の本質定義が可能になり、したがつて世界における合理性は知性に還元されるのである。デイートリヒは『カテゴリーの実在の起源について』(Tractatus de origine rerum

praedicamentaliū)のなかで以下のように述べている…

「ところで次のことも考察されなければならない。すなわち上において仮定され、なんらかの方法によつて明らかにされたこと、すなわち第一の意味によつて類として整序された事物であるなんらかの存在者が知性によつて構成されるということである。というのは、上で語られたことは、そのような存在者が、形相的にそして始原から名称によつて表示されることに關して、いかなる根拠においても自然のはたらきによるものではないということだからである。しかし存在者の総体においては、自然あるいは知性のほかにその始原はないのであるから、いまそれが自然ではない以上、知性がこれらの存在者の原因としての始原であることは必然的である。」⁽¹⁴⁾

存在者の始原として知性が理解されていることは、知性が存在者全体の類似であるという意味にとどまらず、知性は存在者の範型(exemplar)であるという解釈を導くことになる。⁽¹⁵⁾ というのも、知性はその本質の固有性にしたがつて普遍的な本性なのだから、知性の対象はこれとかあれとかの存在者の何性(qualitas haec vel illa)ではなく普遍的な何性、すなわち存在者であるかぎりの存在者の何性だからである。本質による知性は、端的な本質の固有性に従うという単一な仕方によつて、すべての存在者の知性的な類似性を自己のうちに作り出す。したがつて、知性はある意味で知性的な仕方ですべての存在者なのである。⁽¹⁶⁾

4. 1. 2. 魂の実体の始原としての能動知性

知性がすべての存在者であるという命題は、デイトリヒも引用していた『デ・アニマ』第三巻において提示されている能動知性と可能知性との差異という観点から、二様の仕方で捉えらる。すなわち可能知性は可能態において、能動知性は現実態において知性的にすべての存在者であることは必然的でなければならぬ⁽¹⁷⁾。しかしここで問われるべきことは、そもそも能動知性と可能知性をいかに解するのか、そして両者の関係をいかに捉えるのか、ということである。

まずは能動知性に関してデイトリヒは次のように述べている：

「能動知性は魂の実体それ自体を原因づける始原であり、それは実体に即して言えば、ある仕方において生物における心臓のように、内在的な始原であると私は言う⁽¹⁸⁾。」

そして能動知性と可能知性との関係については次のように述べている：

「能動知性こそが可能知性における可知的形相の、すなわち可能知性の全本質である可知的形相の能動的にしてそれ自体として存在している始原なのである⁽¹⁹⁾。」

デイトリヒにとって能動知性は魂の実体の始原であって、さらに可能知性との関係で言えば、この知性の可知的形相が能動知

性にほかならない。能動知性と可能知性との相対関係は、アウグスティヌスに即して言えば、精神の秘所（*abditum mentis*）と外的認識（*exteriora cognio*）に対応し⁽²⁰⁾、「創世記」の聖句から言えば、像（*imago*）と似姿（*similitudo*）にそれぞれ対応する⁽²¹⁾。われわれ人間が神の像と似姿に向けて造られていることの啓示は人間における知性的なものに即して解釈され、人間が能動知性と可能知性を有していることの意味として理解される。ここに見られるのは、啓示とアリストテレス哲学とのアウグスティヌスの媒介による連関であり、しかしその連関はやはり新プラトン主義的コスモロジーによつて有機的色彩を帯びている。すなわち、『神学綱要』命題一四六⁽²²⁾に見られる、そのはじめがその終わりに類似していることによる神的なものの発出における円環構造、さらに同じく命題一四七⁽²³⁾に見られる神的段階における下位のものの上位のものへの類似、そしてここから導き出される神的段階における類似的連続性である⁽²⁴⁾。神とのこうした有機的連関は、すべての存在者が神的善性を分有することによつて直接的に神に還帰するという構造の基礎をなしている⁽²⁵⁾。ということは、能動知性は神が人間のうちに直接的に植えた最高のものすなわち神の像であつて、能動知性の働きによつて人間には神の直観が可能であり、神へと直接的に近づくことができることが帰結する⁽²⁶⁾。

4. 2. ベルトルト：能動知性の固有性としての *authypostaton*

ベルトルトはデイトリヒ知性論の独自性をほぼ全面的に継承していることは、『註解』においてデイトリヒの著作とくに『至福直観について』と『知性と可知的なもの』が頻繁に引用さ

れていることにも示されている。ベルトルトは自らの解釈を展開するさいにも、そのほとんどの場合、デイトリヒの著作から当該の箇所をそのまま引用することから始めている。

さて、ベルトルトの知性論の性格を概説するにあたり、まず『神学綱要』第一六八命題⁽²⁷⁾の解釈から始めよう。解釈の冒頭においてベルトルトは、知性を本質的に現実態であるものと本質的可能態であるもの、すなわち能動知性と可能知性とに区別されることに注意を促している。そのうえで、この命題に言及されている知性、すなわち認識主体とその認識対象とが認識活動において同一となる知性とは能動知性であることが確認される。つまり、能動知性の本質とは、自己を認識する活動それ自体にほかならない。

能動知性に対するこうした性格づけは、デイトリヒにおける「自らの本質によって現実態である知性」(*intellectus in actu per suam essentiam*)⁽²⁸⁾という解釈に基づいていることは言うまでもない。しかしベルトルトは『神学綱要』第四一命題から第四九命題において主要テーマとなっている概念すなわち「*authypostaton*」⁽³⁰⁾に注目し、それを能動知性の固有性として解している。つまり、ベルトルトによれば、自らの本質によって現実態として存在している知性は、それ自体として本質的な認識活動である。ということとは、この知性は自己にとって認識の始原である特定の形相によって現実態となるわけではない。自らの本質に固有の根拠にしたがっている能動知性は他者に形相を有しているわけではなく、むしろ自己自身によって存立している「*authypostaton*」であり、ベルトルトによれば、これがすなわち「自らの本質によって存在している」という意味である。⁽³¹⁾

このような「*authypostaton*」としての能動知性における認識構造をベルトルトは以下のように明らかにしている。能動知性は自らに固有なる本質的認識活動によって、自己自身へと到り、そこで自己自身と完全に一致することになる。この一致とは、自らの本質が存在へと取って替わることを意味している。この解釈は、自らの始原を認識することを可能にする《根源的認識》(*intellectio*)⁽³²⁾という、デイトリヒ知性論に見られる概念に基づいているが、ベルトルトは以下のように独自のアレンジをほどこしている。つまり、《根源的認識》が前もって認識されるという受動的認識が自己の実体に関するかぎりでの存在へと基礎づけられることになる。そしてその実体とは自己の始原の観念(*conceptus*)⁽³³⁾にほかならない。

以上の考察から三つの契機、すなわち自己の始原の観念、知性の本質、自己自身の認識が導かれる。ベルトルトによれば、これら三つの契機は能動知性においては実在的にも本質的にも同一である。⁽³⁴⁾つまり能動知性の認識活動の目的は自己自身による自己自身の認識であり、すなわち能動知性とは自己自身から出て、自己自身の始原へと還帰していく活動それ自体である。

5. *unum animae*

ベルトルトは『神学綱要』第一六二命題に述べられている真なる存在者を照らす一なるものは最も神的なものであり、それは存在者、生命、知性の本質に内在していると述べている。またその一なるものは、神々に由来するすべての発出に受け入れられているものであり、命題七一の記述に基づけば、神々のいかなる贈与

よりも優っているものである⁽³⁵⁾。

さらにベルトルトによれば、この一なるものは、命題一三五に述べられているすべての神的なものが高められ、到達すべき神的な一性である。そしてそれは『神名論』第七章の記述に基づいて、われわれのなかにある「精神の本性」(mentis natura)を超越しているものと解される⁽³⁶⁾。

しかしここで注目されるべきことは、ディートリヒが「神がわれわれの本性に植えたつけた最高のもの」を能動知性として見なし⁽³⁷⁾たが、ベルトルトはそれを第一の一なるものの《痕跡》であり、照明であると解していることである。ベルトルトによれば、この痕跡はわれわれ人間の能力、存在、生きていること、知性を有していることを根拠づけている⁽³⁸⁾。ディートリヒは、前述したように、能動知性を魂の実体を根拠づける始原であるとしたが、ベルトルトはそれに対してこの痕跡を、プロクロスの *De providentia* から引用し、*unum animae* と名づけている。ベルトルトによれば、*unum animae* は知性を超えた認識であり、プラトン以前の神学者たちも真なる神的狂気と称して明かにしてきたものである。神的狂気といってもそれは知的刺激剤ということではなく、われわれのなかに存在する一を最高の一に結合するものである⁽³⁹⁾。

以上のベルトルトの見解は、彼がディートリヒの思想にただ単に依拠しているわけではないことを物語っている。つまり、「神がわれわれの本性に植えたつけた最高のもの」を能動知性であると解することで、知性論の領域に限定することにベルトルトは躊躇している。われわれの魂にある神的なものは、「知性」という概念では表現できないものであって、むしろ言語表現それ自体が不

可能なのだとベルトルトは考えているように思われる。

われわれはここでエックハルト独特の表現すなわち「魂のうちの《あるもの》」(*eine in der sêle, aliquid in anima*)を想起する。それは被造的なものではなく、いかなる被造物もそれに触れることはできない。「魂のうちに《あるもの》」は前述した『主の耕地にて』のなかで、当然のことながら断罪されている⁽⁴⁰⁾。ところでエックハルト自身もディートリヒにおける能動知性の解釈から大きな影響を受けていることは事実である。しかし能動知性が魂の実体を根拠づける始原であるにしても、また能動知性が自己の始原である神を認識するにしても、そこには認識主体と認識対象という二項対立の図式をどうしても克服することはできない。つまりわれわれ人間の知性が神を認識する場合、被造的知性の認識原理に基づかなくてはならない。神を認識するためには、神が神自身を認識する仕方に基づかなければならないのである。われわれ人間に神を認識できる根拠があるとすれば、それは魂のうちにある被造的なものでなくてはならないとエックハルトは考え、それを「魂のうちの《あるもの》」、あるいは「魂の根底」(*grunt der sêle*)と名づけた。

ベルトルトはエックハルトのこうした思想に関する経緯を充分に承知している。しかしベルトルトは断罪された「魂のうちの《あるもの》」をそのまま使用することは許されないことも承知している。そこでプロクロスが使用した概念 *unum animae* をもって、*homo divinus* 論を展開し、「最も神的な哲学」の構築を試みたのではないかと考えられる。

おわりに

以上見てきたように、ベルトルトの『註解』には、アルベルトゥスを起点する新プラトン主義的潮流とディートリヒの知性論の影響が色濃く反映されているが、概念「*homo divinus*」をあえて使用しことに伺えられるように、エックハルト問題をベルトルトが十分に考慮していたことは疑いのないことである。したがって、ベルトルトの *unum animae* 解釈は、複雑な歴史的連関のもとで創出されたものである。ベルトルトにとってエックハルト問題解決とはけっしてエックハルト思想を歴史の表舞台から葬り去ることではない。エックハルト自身の目的は新たな神学の構築にあった。⁽⁴⁾ベルトルトが「最も神的な哲学」の構築を目指したのは、エックハルトの本来の意図をベルトルトが汲み取っていたのではないかと考えられる。そのためにベルトルトは、プラトン以前の哲学者にまでさかのぼり、神的狂気を認識の最高形式として捉えた思想としてプラトン哲学に注目したのだろう。そしてベルトルトは、プラトンの最も優れた弟子としてプロクロスの『神学綱要』のなかに真の哲学の姿を見出し、神学と結合させようとしたのではないだろうか。その意味で『註解』はエックハルト問題によってもたらされたドイツ・ドミニコ会における思想的地盤のなかで、そうであつてもエックハルトの遺志を継承したベルトルトの意図の結晶であるように思われる。

【註】

- (1) ベルトルトの『註解』は、ドイツのフェリックス・マイナー社から刊行されている『中世ドイツ哲学者叢書』(*Corpus philosophorum Teutonicorum medi aevi*, 以下 CPTMA と略す)のなかに第六巻として組み込まれている。ここには『神学綱要』の全一一一命題に対して詳細な註解がなされている。したがって、『註解』はかなりの大部であり、そのため九分冊に分かれている。一九八四年から公刊されているが、現在においても、第五分冊(命題一〇八から一三五)、第八分冊(命題一八四から二二一)は未刊である。

- (2) Sturlese, L., *Albert der Große und die deutsche philosophische Kultur des Mittelalters*, in: *Freiburger Zeitschrift für Philosophie und Theologie*, Bd. 28, 1981, 133-147.

ストアレーゼはこの論文をもとにして、一九九三年に *Die deutsche Philosophie im Mittelalter: Von Bonifatius bis zu Albert dem Großen* (748-1280) を発表している。なお、この著書に関して、報告者は書評を書いている。

『中世思想研究』第三七号、中世哲学会編、一五三一―一五六頁、一九九五年。

- (3) ベルトルトの名前の表記に関しては、一八世紀までは統一されていなかった。彼の『プロクロス神学綱要註解』には現在、オックスフォード (Oxford, Balliol College 224b) とヴァチカン (Cod. Vat. lat. 2192) に二つの写本が遺されている。前者に記載されている著者名は「Bertold」あるいは「Berealdus」となっており、後者には「Bartholomaeus」とある。

(c) *Expositio super Elementationem theologicam Procli*, Expositio tit. K, Sturlese, 47, 10-11.
Expositio tit. K, Sturlese, 48, 7-8: Hinc est, quod oportet non tam tractantem, quam audientem esse divinum hominem et

- attentum.
- ところで「神的人間」は異端として断罪されたエックハルトの命題のなかに含まれている。
- 第一二条：聖書がキリストについて述べているすべてのことは、善きとして神的な人間にも完全に証明されている。
- 第一三条：神的本性に固有なものはすべて、正しき神的人間にも固有なものである。したがってこのような人は、神が行うすべてのことを行い、神と一緒にたて天と地を創造したのであり、永遠の言葉を生む者であり、すなわちこの人がいなければ、神はすべきことをなにも知ることはなかったであろう。
- (10) Flasch, K., *Einführung*, in : Berthold von Moosburg, *Expositio super Elementationem theologicam Procli, CPTMA*. VI, 1, S. XVI.
- (11) ベルトルトは『註解』の全体の序論の前に、「教会博士」(Doctores Ecclesiae)として二六人の名前を列挙している。そのなかにはディオニュシウス、アウグスティヌス、ボエティウスと並んで、ドミニコ会からはアルベルトウス・マグナス、トマス・アキナスとともにディートリヒの名前が記されている。トマスが一三二三年にはすでに列聖されていることから考えれば、ドミニコ会士であるベルトルト

は当然トマスの名前はあげなければならなかったであろう。しかしトマスとともにディートリヒの名前が併記されていることは注目に値する。というのは、ディートリヒは聖体論をめぐるトマスとトマス主義者たちを「ありきたりなことしか言わない連中」(communiter loquentes)と蔑称するほど痛烈に批判しているからである。それとともに、ドミニコ会内部においてもいわばディートリヒ派とトマス派との間で少なからず論争が展開されていた。つまりベルトルトが「教会博士」のなかにトマスとともにディートリヒの名前を記したことは、ベルトルトがドミニコ会のなかで中立の立場にあったということではなく、ディートリヒの思想を継承し尊重していることを物語っている。しかしそれだけではなく、エックハルトの断罪の直後という時代状況のなかで、ディートリヒの思想を土台としながらドミニコ会の、厳密に言えば、ドイツ・ドミニコ会の学問的立場を新たに創出しなければならぬという歴史的使命をベルトルトは抱いていたように思われる。

なお、聖体論をめぐるディートリヒとトマスとの論争に關しては以下の拙論を参照されたい。

「聖体に関して哲学することは可能か——中世における聖体論をめぐる哲学と神学の論争——」、『東洋哲学研究所紀要』第二〇号、二〇〇四年、二六四—二九二頁。

- (12) Theodoricus de Vriberch, *De intellectu et intelligibili* II 1; ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1: 146, 5-12: Est igitur considerandum, quod omnis intellectus inquantum

intellectus est similitudo totius entis sive entis inquantum ens, et hoc per suam essentiam. Et super hoc fundatur dictum Philosophi in III *De anima* (430a14-15), scilicet quod intellectus agens est, in quo est omnia facere, intellectus possibilis, in quo est omnia fieri. Quod quidem contingit ex hoc, quod uterque istorum intellectuum est per essentiam similitudo omnium entium, quamvis unus eorum secundum actum, scilicet intellectus agens, alter secundum potentiam ante intelligere, scilicet intellectus possibilis.

- (13) 知性はすべての存在者の類似であるこの表現は、エックハルトの『創世記註解』(*Expositio libri Genesis*) 第一一五節にも見られる。すなわち「知性はそれゆえ、知性それ自体としては、全存在者の類似であり、存在者の総体を自己のうちも含んでいるのであって、これとかあれとか切り離しているわけではない」(*In Gen.* I n. 115; LWI, 272, 3-5) と述べられている。

- (14) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de origine rerum praedicamentarium* 5 (1); ed. Sturlese, L., *CPTMA*. II, 3: 181, 5-11: Considerandum autem et hoc, quod supra suppositum est et aliquo modo ostensum, scilicet quod entia aliqua, quae sunt res primae intentionis ordinabiles in genere, constituuntur per intellectum. Dictum est enim supra, quae ratione huiusmodi entia quantum ad id, quod formaliter et principaliter significatur per nomen, non possunt esse ab actu naturae. Cum autem non sit principium in

universitate entium nisi vel natura vel intellectus, si natura non est, necesse est intellectum esse horum entium causale principium.

- ($\frac{19}{2}$) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de visione beatifica* 1.1.4, (1); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 28, 2-3: intellectus per essentiam est exemplar.

- ($\frac{19}{1}$) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de visione beatifica* 1.1.4, (2); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 28, 7-29, 13: Quod manifestum est ex obiecto eius, quod est quiditas non haec vel illa, sed universaliter quaecumque quiditas et ens inquantum ens, id est quodcumque rationem entis habens. Quia igitur eius essentia, quidquid est, intellectualiter est, necesse ipsum intellectum per essentiam gerere in se intellectualiter similitudinem omnis entis, modo tamen simplici, id est secundum proprietatem simplicis essentiae, et ipsum esse intellectualiter quodammodo omne ens.

- ($\frac{17}{1}$) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de visione beatifica* 1.1.4, (3); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 29, 14-21: Quod quidem contingit dupliciter: uno modo in potentia seu potentialiter, ut in intellectu possibili, in quo est omnia fieri, secundum Philosophum in III *De anima*, alio secundum actum, puta in intellectu agente, in quo est omnia facere. Alias enim, nisi uterque istorum intellectuum esset quodammodo et intellectualiter omne ens, ille quidem in potentia, scilicet intellectus possibilis, hic autem, id est intellectus agens,

in actu, impossibile esset hunc quidem omnia facere, id est intellectum agentum, in illo autem omnia fieri, id est intellectu possibili.

- ($\frac{19}{2}$) Theodoricus de Vriberch, *De intellectu et intelligibili* II 2 (1); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 147, 50-52: intellectus agens est principium causale ipsius substantiae animae, principium, inquam, secundum substantiam aliquo modo intrinsecum sicut cor in animali.

- ($\frac{19}{1}$) Theodoricus de Vriberch, *De intellectu et intelligibili* II 2 (2); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 147, 53-55: ipse intellectus agens est activum principium et per se formae intelligibilis in intellectu possibili, quae forma intelligibilis est tota essential intellectus possibilis.

- ($\frac{18}{1}$) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de visione beatifica* Prooemium, (5); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 14, 44-47: qui (philosophus) distinguunt in intellectuali nostro intellectum agentum ab intellectu possibili, ut idem sit intellectus agens apud philosophos, quod abditum mentis apud Augustinum, et intellectus possibilis apud philosophos, idem, quod exterius cogitativum secundum Augustinum.

- ($\frac{17}{1}$) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de visione beatifica* 1.1.1, (3); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 15, 22-26: Quod ergo dicitur ad similitudinem, hoc pertinet ad exterius cogitativum seu intellectum possibilem et ea, quae sui dispositioni subsunt. Quod autem dicit ad imaginem, quae consistit in

aeternitate et unitate trinitatis, refertur ad abditum mentis seu intellectum agentem, quo substantia animae figitur in aeternitate.

- (21) Proclus, *Elementatio theologica*, prop. 146; Vansteenkiste, 508: Omnium divinorum processuum ad sua principia assimulantur, circulum sine principio et sine fine salvantes per conversionem ad principia.

- (22) Proclus, *Elementatio theologica*, prop. 147; Vansteenkiste, 508: Omnium divinorum ornatuum summa ultimis assimulantur superpositorum.

- (23) Proclus, *Elementatio theologica*, prop. 147, comm.; Vansteenkiste, 508: Si enim oportet continuitatem esse divini processus et propriis medietatibus unumquemque ordinem colligari, necesse summitates secundorum copulari finibus primorum. Copulatio autem per similitudinem. Similitudo ergo erit principiorum submissi ordinis ad ultima superlocati.

- (24) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de visione beatifica* Prooemium, (3); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 13, 28-14, 30: ens quodcumque, quod quantum ad summum gradum suae perfectionis in Deum immediate reducitur secundum participationem divinarum bonitatum.

- (25) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de visione beatifica* Prooemium, (6); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 14, 54-56: ipse (intellectus agens) est illud supremum, quod Deus in natura nostra plantavit, et ideo, ut praemissum est,

secundum ipsum immediatam approximationem ad Deum sortimur in illa beata visione.

- (26) Proclus, *Elementatio theologica*, prop. 168; Vansteenkiste, 515: Omnis intellectus secundum operationem novit quod intelligit, et non alterius quidem proprium intelligere, alterius autem intelligere quod intelligit.

- (27) *Expositio super Elementationem theologicam Procli*, prop. 168 A; ed. Jeck, R. und Tautz, J., *CPTMA* VI, 7, 79, 14-15: De primo sciendum, quod omnis intellectus aut est se ipso per essentiam actus et in actu aut se ipso per essentiam potentia et in potentia.

- (28) Theodoricus de Vriberch, *De intellectu et intelligibili* I 3 (1); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 138, 34.

- (29) $\kappa\alpha\tau\alpha\tau\alpha\chi\epsilon\iota\sigma\tau\alpha\iota\ \tau\alpha\ \delta\epsilon\ \alpha\iota\theta\upsilon\pi\acute{o}\sigma\tau\alpha\tau\omicron\nu\ \iota\sigma\theta\iota\sigma\tau\acute{\epsilon}\nu\ \eta\ \epsilon\iota\sigma\eta\gamma\epsilon\gamma\omicron\tau\alpha\iota\ \epsilon\iota\varsigma\ \tau\eta\ \nu\epsilon\tau\epsilon\sigma\tau\eta\ \mu\epsilon\tau\epsilon\tau\epsilon\sigma\tau\alpha\tau\omicron\nu\ \alpha\pi\alpha\gamma\epsilon\sigma\tau\eta\ \iota\sigma\tau\eta\ \nu\epsilon\sigma\tau\eta$

- (30) *Expositio super Elementationem theologicam Procli*, prop. 168 B; ed. Jeck, R. und Tautz, J., *CPTMA* VI, 7, 83, 137-143: Primo enim ipse est per essentiam in actu, quoniam ipse est per essentiam actus intelligendi. Ex hoc sequitur secundo, quod non fit in actu per aliquam formam, quae sit sibi principium intelligendi. Ex his consequens est tertium, scilicet quod ipse secundum propriam rationem suae essentiae non est forma in alio, immo ipse est antipostaton, id est per se subsistens, scilicet per essentiam suam.

- (31) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de visione beatifica* 1.2.1.1.7, (3); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 43, 18-20: Et sic in sua substantia essentialiter est id, quod est sua sui ipsius intellectione intelligens se ipsum per essentiam suam, quod quidem originaliter et principaliter est ex eo, quod intelligit suum principium.
- (32) *Expositio super Elementationem theologicam Procli*, prop. 168 B; ed. Jeck, R. und Tautz, J., *CPTMA* VI, 7, 84, 151-154: Hinc autem operationi intelligi etiam praeintelligitur »intellectio«, qua »intelligit auum proprium principium«; qua intellectione sui principii passiva constituitur in esse quantum ad suam substantiam eo, »quod sua substantia non est nisi conceptus«.
- (34) *Expositio super Elementationem theologicam Procli*, prop. 168 B; ed. Jeck, R. und Tautz, J., *CPTMA* VI, 7, 84, 155-157: haec tria, scilicet conceptus sui principii, ipsius intellectus essentia et sui ipsius intelligentia, idem sunt realiter et essentialiter.
- (35) *Expositio super Elementationem theologicam Procli*, prop. 162 B; ed. Jeck, R. und Tautz, J., *CPTMA* VI, 7, 17, 32-36: Et tales unitates sunt divinisissima, quae sunt in essentiis entium, viarum, intellectuum et ceterorum, et sunt supposita traditionibus aliorum deorum, quorum illustrationes pertingunt ad ipsa sicut a prime uno elaborata, et sunt susceptiva omnisprocessus, qui est ab ipsis diis, et
- (36) praecedunt simpliciter omnes donationes ipsorum deorum per 71.
- (37) *Expositio super Elementationem theologicam Procli*, prop. 162 B; ed. Jeck, R. und Tautz, J., *CPTMA* VI, 7, 17, 37-39: Hae enim sunt illae unitates, de quibus aliquando dictum est super 135, et sunt in nobis excedentes secundum Dionysium 7 cap. De divinis nominibus »mentis naturam«, et vocantur unitates superexaltatae.
- (38) Theodoricus de Vriberch, *Tractatus de visione beatifica* prooemium, (6); ed. Mojsisch, B., *CPTMA*. II, 1; 14, 53-55: intellectus agens incomparabiliter praeeminet et gradu suae entitatis excedit intellectum possibilem et quod ipse est illud supremum, quod Deus in natura nostra plantavit.
- (39) *Expositio super Elementationem theologicam Procli*, prop. 162 B; ed. Jeck, R. und Tautz, J., *CPTMA* VI, 7, 17, 40-43: Sicut igitur in nobis sunt »illud intimum et supremum, quod Deus in natura nostra plantavit«, quod etiam est »vestigium« et illustratio solius prime »unius«, quod determinatur ulterius aliis illustrationibus, puta virtutis, entitatis, vitae, intellectualitatis et ceteris.
- (40) *Expositio super Elementationem theologicam Procli*, tit. C; ed. Sturlese, R., *CPTMA* VI, 1, 40, 103-106: Et breviter infra prosequitur de cognitione, quae est supra intellectum, quam theologi etiam ante Platonem divulgant vocantes eam ut vere divinam maniam: »Ipsium enim aiunt unum animae, non

adhuc intellectuale excitantem”, sed coaptantem ipsum unum uni summo.

- (40) *In agro dominico*, in: *Heinrich Denzinger, Enchiridion symbolorum definitionum declarationum de rebus fidei et morum*, hrsg. von Peter Hünemann, 38., aktualisierte Auflage, 1999 Freiburg i. Br., Basel, Rom, Wien, S. 403: Aliquid est in anima, quod est increatum et increabile; si tota anima esset talis, esset increata et increabilis, et hoc est intellectus.

しかしこの勅書が出される以前にエックハルト自身によつて提出されたいわゆる『弁明書』において、魂の内には非被造的な《あるもの》があつて、しかし魂全体が非被造的なのではないと主張している。

Proc. Col. I, n. 137; LW V, 298, 12-14: Ad sextum cum dicitur: »Una virtus est in anima, si anima esset talis, ipsa esset increata et increabilis«. Falsum est et error. Nam, sicut dicit alius articulus, supremae potentiae animae »sunt creatae in anima et cum anima«.

- (41) このことに関しては、拙論「エックハルト神学の構築とその基本構造」(南山大学に提出した学位申請論文)を参照されたい。